

「武庫川国文」第93号 抜刷

令和4年10月20日 発行

日本語教師の実践知の描き方
—「コラムほっとケア」の分析から—

上 田 和 子

日本語教師の実践知の描き方

—「コラムほっとケア」の分析から—

上田 和子

はじめに

2000年代に入り、日本で看護・介護に従事する外国人材への需要が頻繁に取りざたされるようになった。具体的には平成16(2004)年に日比首脳間において「日本フィリピン経済連携協定」が大筋合意されたことがその契機となっている。二国間の経済連携協定(以下、EPA)は、その後タイ、ベトナム、インドネシアなどASEAN諸国とも順次締結が進んでいる。そもそもは二国間貿易における自由化が大きな目的であったが、EPAでは締結国と幅広い分野で連携し、締約国・地域との関係緊密化を目指すとしている。そこには人材交流も含まれ、それが2018年に閣議決定された「特定技能」の在留資格を持つ外国人材の受け入れへとつながる。

これら特定技能の「外国人材」の受け入れは、日本語教育界にも様々な影響を及ぼしているが、その動きが本格化する前に、国際交流基金関西国際センターでは「日本語でケアナビ」という辞書サイトを開発しその後も公開している。本サイトの開発に関してはいくつか報告がある(上田2007、上田他2008など)。

その中で、開発者たちによって開発過程を多角的に記述したブログが「こちらケアナビ開発室」である。現在、このサイトは公開していないが、筆者は「ブログによるプロジェクト評価」として、その内容を報告した(上田2009)。このブログは、開発の裏話のようなものの他、開発者たちが個人としてどのような「思い」でこのプロジェクトに携わり、そこにどのような工夫があったかが仕事の現場として描かれている。筆者はそのプロジェクトチームの一員であったが、10年以上を経て、当時なぜブログという手法を用いて記録しようとしたのか、またそれをプロジェクト評価として受け止めていたのかを改めて検証してみたいと考えた。目的の一つに、実践を記述する方法、実践を記述する意味には何があるのかを明らかにしたいと考えたからである。特に、プロジェクトメンバーの多くは日本語教師であったことから、教育現場を仕事の場としてきた教師が、だれのために、何のために、このサイトを開発し、その際、何を重視していたのか、の再考が必要と考えた。

ただし、上述のように「こちらケアナビ開発室」ブログは現在は公開していない。それを探るには、出版された論文(2009上田、前掲)と「日本語でケアナビ」そのものから片鱗を掬い取るしかない。そこで、本稿では「日本語でケアナビ」にある「コラムほっとケア」に着目し、日本語教師としての実践知がどのような形でプロジェクト、ひいては日本語教育に貢献しているのか、あるいは貢献していないのかの検討を試みることにする。

1. 「日本語でケアナビ」概要

1.1 サイト開発経緯

「日本語でケアナビ」は、国際交流基金関西国際センターが開発し、2007年7月より公開している日本語教育支援のための多言語辞書機能を持つインターネットサイトで、使用言語は、日本語—英語版、日本語—インドネシア語版である。使用対象者は日本語学習者と日本語学習支援者を想定し、学習者は日本での就労をめざす看護師・介護職に就く者および一般的な日本語学習者で、学習支援者には日本語教師や地域ボランティア、さらに就職先の同僚や関係者などを念頭に置いている。

辞書サイト開発プロジェクトが始まったのは2005年4月からで、当初は辞書や教材開発に向けたデータベースづくりをしていた（上田 2007 前掲）。2006年度は、集積したデータをどのようにユーザーに届けるかという視点からサイト開発に取り組み、デモ版の作成などを経て2007年4月に関係者向け公開、同年7月から一般公開している（上田他 2008 前掲）。その後、筆者は同プロジェクトからは離れたが、現在はユーザーとして折に触れて本サイトを使用している。

1.2 「日本語でケアナビ」の学習支援機能

「日本語でケアナビ」サイトには、主たる辞書機能以外にいくつかのリストやコラムが日本語学習支援機能として搭載されている（表1）。

	項目	説明文
1	例文をさがす	場面別に例文をさがすことができます。場面を選んで「検索」ボタンを押してください。
2	べんりな声かけ表現	仕事場面で必要な声かけを集めたもの
3	漢字 200	職場でよく見る漢字が200あります。漢字を選ぶと、その漢字を使ったことばや使い方が勉強できます。
4	かぞえかた	ひとつ、ふたつ、いち、に、さん・・・いろいろな「かぞえかた」を集めました。数字、時間、日付、その他
5	コラムほっとケア	国や文化がちがうと、生活や考え方もいろいろです。そして、看護や介護のやり方がちがうこともあります。そんな例を集めてみました。

（表1：「日本語でケアナビ」の学習支援機能）

単語やフレーズの意味を提供する辞書機能が「日本語でケアナビ」の基本的な機能であるが、表1にある項目を見ると、そこに開発者の意図が読み取ることができる。

1) 日本語学習支援

「例文をさがす」「漢字200」「かぞえかた」には、学習しやすさへの意図がみられる。日本語学習の上で最も障害になるのが漢字をはじめとする文字学習であり、入門期の学習者への教師視点からの配慮といえる。

2) 介護現場での業務遂行

介護現場で最も重視される言語活動は「声かけ」であるといっても過言ではない。実際、介護業務に関する教材には、介護作業のあらゆる場面における「声かけ」が重視されており、専門職として従事する外国人材にとっても同様である。それを意識的に学ぶために「便利な声かけ表現」として場面とともに搭載されている。

3) 日本事情など社会的文脈理解

上記とやや主旨を異にするのが「コラムほっとケア」である。これは言語習得のための機能というよりは、日本の社会、職場、人間関係などいわば日本事情をとりあげ、簡潔に表現している。また、日本事情だけでなくフィリピン、インドネシアの文化事情も取り上げている。

1) 2) については、開発者の多くが日本語教師であることから、ひらがな、カタカナ、漢字とその組み合わせという日本語の複雑な表記システムの習得に時間を要することや、名詞ごとの助数詞（1枚、1本、一人など）の習得が決して容易ではないという視点や配慮が伺える。「特定技能・外国人材」として日本語を学ぶ学習者が、比較的短い学習時間を経て介護等の実践現場に入ることから、「働きながら日本語を学ぶ」という状況の支援を重視しているともいえよう。一言で「日本語を学ぶ」といっても、いわゆる学校教育の文脈での語学学習ではなく、語学研修を経て介護現場で即戦力として従事することを期待されるとすると、学習者が言語を使用・運用できるようになるのにはそれなりの時間がかかることを、授業を通じて教師は経験的に認知している。特に、数字の表現や日々の業務記録、文字による情報伝達など、職場で必要となる言語知識や能力は一朝一夕に身につくものではない。「声かけ」「漢字」「数え方」などを特に取り上げている理由はそこにある。

1.3 外国語学習における日常的・基本的言語の知識と運用力の獲得

「日本語でケアナビ」は、看護・介護の専門職に就く「外国人材」および周囲で彼らを支援する地域社会や職場の日本人々を支援することを目的としている。専門日本語支援の一環ともいえるが、そもそも専門的な日本語と専門家として働くための日本語は同一のものなのか、という議論がある。専門家のための日本語となると、専門用語や国家試験対策としての語彙を含む専門知識の獲得が思い起こされる。しかし、日本語教師として開発に携わるチームの見解は、それ以前の基礎的な日本語習得に注目していることが、上述の「学習支援機能」から見て取れる。その一つが「かぞえかた」である。数字の知識は、特定の外国語学習でも早期に取り組みまれるものと考えられるが、知識としてインプットされることと、それを運用する言語能力の獲得にはかなりの隔たりがある。特に、名詞を数える際に用いられる助数詞（一枚、一本、一年、ひとつなど）の習得には、時間と集中力が求められる。

卓近な例ではあるが、たとえば「ちょっと、これあっちに持って行って」という簡単な表現の中には、いくつもの「学習項目」が潜んでいる（誰と誰の会話か、持っていく

人はだれかなどを把握することなど)。日本語教師にはそれを一瞬で分析してしまう職癖があるのかもしれない。このような日本語教師について、次のような記述で確認することができる。

「日本語でケアナビ」を作るどの段階でも、開発者らの間で話題に上がったのは「使い手」つまり「学習者」のことである。学習者とは特定の人物を指すのではなく、開発者らが日ごろ授業の中で出会ってきた様々な学習者の群像である（中略）。語彙を採用するときも、デザインの工夫を凝らすときも「日本語でケアナビ」を形作る概念づくりに最も貢献してくれたのは彼ら学習者だった（上田 2009, P79）

日本語学習者と日ごろ接している日本語教師には、それらのフレーズに触れるごとに、学習項目が瞬時に連想されるともいえる。専門日本語の学習を考える際、その基礎となる日常的な言語表現の獲得難度の高さが思いやられるのである。それが学習支援機能にも表れている。

さて、もう一つの支援機能「コラムほっとケア」には、どのような日本事情、各国文化事情が取り上げられているのだろうか。そこに開発者である日本語教師の「思い」を読み取ることができるのか、下節にて分析を進める。

2. 「コラムほっとケア」の各国文化事情

2.1 日本の文化事情の分類と分析方法

データ分析では、「コラムほっとケア」で取り上げられた全項目（日本：35件、フィリピン：11件、インドネシア：15件）の説明文を分析し、鍵概念のコードを付けた。

日本に関する文化事情として取り上げた項目の説明文は、日本語に関する【言語知識】があり、それらはさらに①社会言語的情報、②文字運用、③婉曲表現、④オノマトペの下位概念を持つ。続いて【コミュニケーション】、【社会生活・文化】に分類し、必要に応じて下位コードを付した。紙幅により、項目の一部のみ抜粋する。

項目	説明文
お医者さん	仕事の名前に「お～」をつけたり、後ろに「～さん」をつけて呼ぶことがあります。お医者さん、看護師さん、師長さん。
男/男の人/男性	「おとこ」は男性の意味です。「男の人」は丁寧な言い方です。「男性」は改まった印象を与えます。
ご家族の方ですか？	「お～」や「ご～」は単語の前につける敬語です。「ご～」はおもに漢字のことにばにつけます。

「お茶、ちょうだい」「お茶、おくれ」「茶をくれ」	物をもらうときに「・・・をください」と言いますが、同じ意味の言葉に「ちょうだい」があります。気のはらない日常的な場面で、男性も女性もよく使います。「おくれ」（年配の人が若い人に対して）、「くれ」（男性のぞんざいな言い方）もあります。
名前の呼び方	姓も名も「なまえ」です。男性も女性も、未婚でも既婚でも、ふつう姓に「さん」をつけて呼びます。子供を呼ぶときには名前に「ちゃん」をつけることが多いです。
ぼんぼん痛い	子どもに対して使うことばには「お～」をつけたり、くり返す言い方が多いです。「おつむ」「おめめ」「ぼんぼん」など。

(表 2 : 【言語知識】 ①社会言語的情報)

項目	説明文
漢字、ひらがな、カタカナ	日本語にはひらがな、カタカナ、漢字の三種類の文字があります。現在、カタカナは外来語を表すのに使い、漢字とひらがなで文章を書きます。
ローマ字	ローマ字とは、ラテン文字のアルファベットを用いて日本語を表記したものです。
カタカナ語	日本語には外国語から入ったことばがたくさんあります。普通、カタカナで書きます。ただし、もともとの外国語の意味と日本語で使われるものの意味がかなり離れてしまったことばも多いです。たとえば、日本語の《マンション》は中高層の集合住宅、英語の《Mansion》は大邸宅を示します。
メス or ナイフ?	病院で使う言葉はドイツ語や英語から来たものがたくさんあります。「メス」はオランダ語、「カルテ」はドイツ語から。

(表 3 : 【言語知識】 ②文字の運用)

項目	説明文
お迎え	「死」ということばを直接口にするのを避けることが多いです。「なくなる」「あの世」「お迎えが来る」というのはその例。
トイレはすみましたか?	「うんこ」「おしっこ」ということばを直接口に出さないで、「トイレ」「お手洗い」という場所のことばで表すことがあります。

(表 4 : 【言語知識】 ③婉曲表現)

項目	説明文
むずむずする	むずむずする、頭がががする、など、日本語では様子や状態をあらわすときに、音のようなことばをくりかえすことがよくあります。

(表 5 : 【言語知識】 ④オノマトペ)

項目	説明文
どうして目を見ないの？	日本人は話をしている間、ずっと相手の目を見て話しているわけではありません。それは相手を軽蔑しているからではなく、相手に対する尊敬を礼儀正しさを表しているのです。お願いするときは、両手を合わせる人もいます。
会釈 (えしゃく)	相手の顔を見たあと、何も口に出さずに少しうなづく動作を「会釈」といいます。あいさつの一つです。
身振り手振り	コミュニケーションでは「身振り手振り」が役に立ちます。「申し訳ありませんが、よろしく」という気持ちでお願いする時、顔の前で両手を合わせる人もいます。

(表6：【コミュニケーション】非言語コミュニケーション)

項目	説明文
会社での役職	課長は課の代表者です。同じように部の代表者は部長で、会社の代表者は社長です。部は会社の中にあり、課は部の中にあります。人を呼ぶときは名前に役職名をつけます。中村さんが課長の場合、中村課長になります。
緊急連絡	警察を呼ぶときは110、消防車や救急車を呼ぶときは、119に電話をしてください。
先輩・後輩	学校や職場では、年上年下の人間関係があります。先輩は「目上の人」ですから、丁寧に話したほうがいいです。
お金の種類	日本のお金の単位は円です。コインは1円、5円、10円、50円、100円、500円の6種類。お札は1000円、2000円、5000円、10000円の3種類あります。5円と50円のコインは中に穴が開いています。100円のコインはサクラのデザインです。一番高い10000円札の人は福沢諭吉という人で、明治時代の有名な啓蒙思想家。
湯かげんはどうですか？	日本人はお風呂が大好きです。施設では毎日入るのは難しいので、お風呂の日を楽しみにしている利用者の方は多いです。

(表7：【社会生活・文化】)

2.2 キー・コードの解釈

「国や文化がちがうと、生活や考え方もいろいろです。そして、看護や介護のやり方がちがうこともあります。」と、「コラムほっとケア」の説明文にあるが、日本に関する項目のかなりが【言語知識】に属している。これは1.2でも述べたように、「日本語を学ぶ」の目的が介護職に就く「外国人材」に対しては、「職場ですぐに日本語運用が期待される」レベルのものであり、その実現に困難が予想されることに拠るだろう。そのため、少しでも日本語についての理解を促進するように意図された情報がコラムとして取り上げられている。具体例を挙げる。

【言語知識】①社会言語的情報

職業としての「医者」という名詞を会話などでの運用場面では「お医者さん」と呼ぶことなど、辞書的な意味と運用上の表現との差を埋めるための情報などがとりあげられている。同じく人名と呼称の違い、男女差、幼児語など社会言語的要素について折に触れコラムで紹介している(表2)。

【言語知識】②文字の運用

日本語では「ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字」による複雑な表記体系を用いる言語であり、職場での情報共有や作業指示、業務記録などの多くの場面で文字情報が必要となる（表3）。

【言語知識】③婉曲表現

介護の現場では人の生死や生理現象などと、直接、間接に関わらなければならない。通常の日本語学習場面には登場しないが、介護の現場では日常であり、そこではしばしば直接的な表現を避ける傾向がある。意味概念とともに婉曲的な表現が職場で用いられるとすれば、成人である「外国人材」にもそれを理解し運用することが求められる（表4）。

【言語知識】④オノマトペ

日本語では痛みの表現、症状を訴える場面などで、頻繁にオノマトペが用いられる（ずきずきする、がんがんする、ちくつとするなど）。辞書に取り上げられることは少ないが、介護を必要とする利用者や看護を受ける患者からの訴え、同僚との状況把握場面で頻繁に用いられることが予想される。それら語彙を補助するための説明文となっている（表5）。

【コミュニケーション】非言語コミュニケーション

言語ではなく、視線や表情、身振り手振りから患者や利用者の状況を読み取ることは、介護職にとって重要な技能である。文化ごとに異なるこれらへの注意喚起の意図がうかがえる（表6）。

【社会生活・文化】

ここで取り上げられている多くは、職場の人間関係や日本での暮らしを円滑に進めるための情報である。職場の一員としてのふるまいを促すための情報ともいえる。その一方で、「お風呂」については複数のコラムで取り上げている。入浴介助の業務が単に清潔保持だけでなく、日本の入浴文化としてとらえられており、介護を受ける人にとって入浴には幾層にも重なる意味があることが繰り返し強調されている（表7）。

2.3 フィリピンの文化情報

フィリピンの文化事情を分析したところ、【言語知識】、【コミュニケーション】、【社会生活・文化】、【価値観】の4つのコードが得られた。日本文化のコラムにはなかった【価値観】が半数を占め、そのほかのコードに分類したものの記述にも【価値観】につながる表現が多数見られる（表8、表9、表10、表11）。

項目	説明文
方言って難しい	フィリピンのある地方では、母音の発音がはっきり分かれていなくて、「e」と「i」や「o」の発音が混乱することがよくあります。それで、「e」であるところを「i」とつづられることもあります。 例：「lalaki（ララキ）」（男性）が「lalakeng mabait（ララケン マビ）」（気立てのいい男性）と発音されることもあります。

（表8：【言語知識】⑤方言）

項目	説明文
どうして目を見るの？	人と話すとき、フィリピン人はいつも目を見て話します。視線を合わせないと、うそを言っているか、よくない人だというレッテルを貼られることもあるからです。

(表9：【コミュニケーション】非言語コミュニケーション)

項目	説明文
「介護」は誰の仕事？	原則的にフィリピンでは介護士を雇いません。その代わりに、お手伝いさんや家族の誰かがお年寄りのお世話をしています。
家族のきずな	フィリピン人の家族のきずなは大変強いと言えます。祖父母、両親、子どもはもちろん、子どもが結婚するまで同居するのが普通です。友達のお母さんを「ナナイ（ママ）」、お姉さんを「アテ（お姉ちゃん）」と、家族の一員として呼ぶこともあります。知らない人のことでさえ、「ティタ（おばさん）」、「ティト（おじさん）」、「ロラ（おばあちゃん）」と呼んだりします。
「バヤニハン」って何？	「バヤニハン」はフィリピン人の精神である友情や血縁、地縁など人々のつながりを表す言葉で、英雄を意味する「バヤニ」という言葉から来ています。この言葉にはフィリピンの伝統が表れています。フィリピンの伝統とはつまり、助け合い、いたわり合い、責任を分かち合うという精神を持って困っている人を助けたり、何かを成し遂げるのにみんなで力を合わせようという考えです。
フィリピン人はお祭り好き	フィリピン人はお祝いの事が大好きで、フィリピンは「お祭りの島」と呼ばれています。昔は植え付けや収穫のとき、家を建てた後は、いつもお祝いで幕を閉じていました。後にスペイン人が、フィリピン中の町の祭りという祭りに、お祭りの主役としてカトリックの聖人を取り入れました。年間を通してのお祭りに関する情報は、こちらから。

(表10：【社会生活・文化】)

項目	説明文
高齢者への尊敬	フィリピン人は年長者を大変尊敬しています。年長者と話すときに、「ボッ（敬語）」や二人称複数形の「カヨ（あなたたちは）」、「インヨ（あなたの方の）」や「ニンニヨ（あなたの方の）」という言葉を使うところにも現れています。高齢者に対する敬意は伝統的な「マノ」にも見られます。「マノ」とは年長者の手の甲を若者の額につけて、尊敬と祝福を表すジェスチャーです。
温かいもてなし	フィリピン人の温かく親切で心のこもったもてなしは、よく知られています。お客さんを笑顔で出迎え、訪れた人がぐっすりするように自らの寢室を差し出すことも珍しくありません。また、あなたが道に迷ったとしても、周りにいる多くの人が親切に手助けしてくれるでしょう。
フィリピン人のユーモア	フィリピン人は多くのことに、ユーモアを見出します。彼らはよく笑い、困難な状態の時にさえジョークを言い合います。フィリピン人にとって、厳しい場面においても楽しさを見出し、うまく乗り切れることは普通のことなのです。笑いは日々の辛さや国の惨事、自然災害、難問等乗り越える手助けをしてくれます。
マババウ アン カリガヤハン = 小さな幸せ	意識調査によると、フィリピン人は世界で最も幸せな人々だということです。確かに、貧しさや苦労の中でもいつも笑いを絶やしません。活気に満ちて人生に対して前向きで、面白いことが大好きなフィリピン人には独特で説明しがたい「人生の喜び」があります。フィリピン語の「マババウ アン カリガヤハン」という言葉には、ささやかな物事の中にいかに喜びを見出すかという意味があります。
タフな国民性	フィリピン人は希望にあふれ、くじけない精神の持ち主です。彼らは経済的・社会的状況、自然災害、そして外国からの支配も乗り越えてきました。希望と信念を持って天性の楽観主義で様々な試練や困難に打ち勝ってきたのです。

(表11：【価値観】)

フィリピンの文化事情として取り上げられているものでは、【社会生活・文化】と【価値観】に注目する必要がある。そもそも介護職という職業がフィリピンには存在しない、それは何故かなど、辞書的な意味だけでは理解できない。「外国人材」とともに働く場では、所属してきた社会やその中における存在としての人への理解が求められる。

コミュニケーション・スタイルについては、「目を見るかどうか」がちょうど日本の場合と相対する形で取り上げられている。フィリピン人のふるまいの中に、その人の育ってきた社会的、文化的意味があることが強調されている。ここに見られる開発者の意図について、下節「インドネシアの文化事情」と合わせて考察する。

2.4 インドネシアの文化事情

インドネシアの文化事情を紹介する鍵概念のコードには、【自然・文化】【社会生活・文化】【価値観】がある（表 12、表 13、表 14）。

項目	説明文
コーヒー	マンデリン、トラジャ、スマトラ、スラウェシ・・・これは全部インドネシア原産のコーヒー。インドネシアは世界有数のコーヒー原産国です。たっぷりの砂糖を入れて飲むのがインドネシア流。
島国	日本と同じように、インドネシアも島国です。インドネシアの東西は約 5,000 km と非常に長く、これは日本からインドネシアの距離とほぼ同じです。赤道をまたがる 17,500 以上の大小の島々からなります。
バティック	インドネシアのろうけつ染めの布がバティックです。日常に着るだけではなく、長袖のバティックは礼装にもなります。

（表 12：【自然・文化】）

項目	説明文
マニス	甘いものが大好きなインドネシア人。マニスは甘いという意味です。もう一つの意味は「かわいい」。
ごはん	インドネシアのほとんどの地域で主食は米。インドネシア人はごはんが大好きです。
マンディ	マンディは水浴びという意味です。インドネシア人は湯船に浸かる習慣はなく、シャワーか手桶で水浴びをします。汗をかくと一日に何度もマンディをします。
メラ・プティ	メラは赤、プティは白。赤と白はインドネシアの国旗の色です。日の丸と同じですが、メラ・プティは、上下に色分けしたデザインです。
ジャム・カレット	直訳すると「ゴムの時間」。ゴムのようにのびる、という意味です。約束の時間より 15 分くらい遅れて到着するのはよくあることです。「5 分前集合！」という日本の職場では、ちょっと困るかもしれませんね。
ブンガワンソロ	日本でも有名なこの曲は、インドネシアの歌です。この曲には『一滴の水滴も集まれば大河となり、このソロ川の流れるように独立という民族の願いは誰にも止められない』というメッセージがこめられています。この曲は今も多くの人々に愛されています。

（表 13：【社会生活・文化】）

項目	説明文
お祈り	インドネシア人は必ず自分の信じる宗教を持っています。心を平和に保つために、お祈りは大切です。インドネシア人の約 90%がイスラム教徒です。イスラム教徒の場合、1日に5回お祈りの時間があります。
ティダアバアバ	ティダアバアバは「大丈夫」「気にしないで」「なんとかなる」という意味。インドネシア人が大好きなことばです。相手に対する思いやりであり、人間関係を円滑にすることばです。
ゴトン・ロヨン (相互扶助)	インドネシアでは、ムラでの助け合いの精神をゴトン・ロヨンと呼びます。仕事や地域社会の場で発揮されます。
左手	インドネシアのマナーでは、左手で何かをすることは礼儀に反すること、つまり、よくないことだと考えられています。食事のときは必ず右手です。人に物を渡すときも右です。
多様性の中の統一	インドネシアは多民族国家です。民族だけではなく、言葉も 500 以上あり、宗教も多様です。インドネシアの人は、その多様性の中の統一が大切だと考えています。
和	インドネシア人は日本人と同様、和を尊ぶ民族です。周囲との調和を大切に、謙虚で遠慮がちなインドネシア人の気質は日本人と似ています。

(表 14：【価値観】)

インドネシアの文化事情項目でも、フィリピンと同様、【価値観】に関するものが多いことに注目したい。世界最大のイスラム教人口を擁するインドネシアからの「外国人材」として何が大切なのか、毎日の生活の中で何を重視しているのか、その背景（歴史、宗教、自然など）を取り上げて説明している。しかし、一方で「ごはん」「島国」「コーヒー」などの記述には、日本や日本人との共通点が少なくないことが意識されている。ここから文化的差異の強調だけでなく、共通する習慣や身近な生活様式があることへ認識を促す意図がみられる。

3. 分析

3.1 文化事情の差異

上述のように、日本事情では、そのほとんどが【言語知識】に関するものであり、一方フィリピン、インドネシアの文化事情では、【価値観】につながるものが多数を占めていた。この背景には何があるのだろうか。

3.2 日本の文化事情と開発者の「思い」

コラムでは、どの言語背景の学習者にとっても習得上困難だと考えられるもの、例えば、いわゆる敬語などの待遇表現、人間関係（親疎、内外、男女、社会的立場、年齢差など）に基づく言語の使い分けがその代表的なものである。そのため、【言語知識】（社会言語的情報、婉曲表現など）によって言語使用の背景にある情報を提供しようとしている。それだけでなく、数字を用いた表現や複雑な日本語の文字表記についても、ひととおり授業で習っただけで身につくものではなく、日本語を業務場面で使用し続ける立場に置かれる外国人材への配慮として、これら【言語知識】が優先的に取り上げられていると考えられる。

この背景には、開発者の多くが日本語教師であり、数多くの学習者とかかわってきたことがある。開発当時の「思い」は、以下のように記述されている（上田 2009 前掲 p.78、事例 5：日本語でケアナビの「いま」：「今年一年を振り返る はたんぼ」より）。

学習者を支援する日本語教師や地域のボランティアの人々にとって、どんなケアの言葉が必要なのかを検討することも本プロジェクトの重要な要素だった。「教師としては、こんな資料があればうれしい」「このような形で提供すると授業で使える」と、日本語教師としての立場から自らの体験や要望を語り合った。そこからどのようなサイトを開発し提供すればよいか、教育の現場でどのように活用してもらいたいのか、という共通理解を築いてきたのである。「日本語でケアナビ」の内容や機能はこのような日本語教育の実践そのものが基盤となって構築されている、それが事例 5 で語られる『「作って終わり」ではありませんから』という思いにつながるものなのである。

筆者が開発当時の記憶をたどってみると、辞書として搭載しきれない言語的な内容をコラムに吸収したというのが一つの事情であることが思い起こされる。辞書機能では学習者に対して十分に提供できない日本語運用に関する情報を「コラムほっとケア」で補完しているともいえる。学校や教室という文脈での日本語学習ではなく、それに続く職場で働く人材としての言語運用能力と、特に介護という仕事を遂行する中で、同僚、上司だけでなく、利用者（多くは地域社会に暮らす高齢者）やその家族との日本語によるやりとりは、教科書に登場する標準語、丁寧体の日本語だけではないはずである。日本語の研修を経たとはいえ、いきなり職場のメンバーになって業務に携わる人々、そしてその支援者への一助となるようにという「思い」がある。日本語を話す外国人学習者と日ごろ接することのない「普通の日本人」にとってあまりにも平易なことばが、一つ一つ積み上げて身に着けていく立場からすれば、どれほどの努力を要するものなのか、その中間にたたずむ日本語教師は、「やさしいことはやさしくない」ことが身に染みている。日本社会で成人学習者となり外国語を駆使して専門職として働くというとても課題を前にして、開発者である教師たちが「ことば」に注目してできる精いっぱいのことばが、このコラムには詰まっている。

3.3 フィリピン、インドネシアの文化事情

外国人材の出身国に関する「コラムほっとケア」で取り上げられた文化事情の多くは、その国の文化や【価値観】につながるものが多い。日本の文化事情の多くが言語に集中している理由は上述したとおりだが、外国文化の【価値観】にはどのような「思い」があるのだろうか。「自然、宗教、歴史、ことば、人間関係など」個別の言語表現であっても、そこに含まれる【価値観】が共通している。それらは、「外国人材」が日本で働くようになるまで、どのような場所で、どのような家族や地域社会の人々に囲まれて育ち、よろこびや悲しみをどのように共有しながら人生を過ごしてきたのかという、人を人たらしめる背景について

言及したものである。言い換えれば、「外国人材」を紹介したいのではなく、介護現場に変わった名前を持つ「その人」を理解するための情報が提供されているのである。

開発者の「思い」をさらに深く読むことが許されるならば、「コラムほっとケア」には、同じ職場で働く日本の人々に対して、「外国人材」が、「特定技能ビザを取得した〇〇人」としてでなく、名前を持つ一人の個人であり、コラムにある【価値観】を持つ人なのだとすることを伝えたいという「思い」が込められていると考えられないだろうか。

4. 考察

4.1 介護職としての「外国人材」と個人

介護職は、高齢者（利用者）の生活を支援する業務である。生活支援とは、衣食住行のすべて、すなわち衣服の着脱、食事、入浴、歩行、移動、リハビリなど日常生活をしばしば肌に触れることも含め、至近距離で人と接する仕事である。それを担うには、心的距離も近づかなければならないことが想像できる。外国語を習い、その言葉で利用者に声掛けをするには、言語知識だけではなく、かなり高レベルの言語運用能力が求められるだろう。ときには黙り込む高齢者の意図を推し量り、その生活を支援するという仕事には、高度にコミュニケーション能力が求められる。これは外国人材だけでなく、すべての介護に携わる人に共通して求められる資質であろう。

それを担う「外国人材」だが、彼らも日本人スタッフと同様に、施設で仕事をするだけの人間ではなく、日本社会で過ごす個人の生活もある普通の人なのである。それを同僚として働く人々にも意識し共有してもらいたいという開発者の「思い」が、【価値観】としてそれぞれの項目に現れている。

4.2 【価値観】を巡って

では、日本の文化事情と外国の文化事情の取り上げ方には、なぜ違いが生じているのだろうか。特に日本の文化事情で【価値観】として取り上げられていない理由を考えてみたい。そこには、日本語や日本文化と外国のそれとの間に、開発者らの持つ圧倒的な情報量の隔たりのあるといわざるを得ない。そもそもこのコラムは文化事情を解説するために執筆されたというのではなく、辞書サイトを構築する上で、特に言語運用に関してその背景を読み手に提供したいという補完的なものであった。ことばに【価値観】はすでに内在している。日本語辞書サイトであるからこそ、介護の場面を構成する言葉のすべてに日本的な価値観がある。それを「日本人の価値観」として全面的に出すことが目的ではなく、文化的価値観を理解することと言語運用との相関を提示することを、図らずも暗喩しているのではないか。

それに対し、外国語・外国文化については、ことばの中でもその国の人々にとって心のよりどころとなるものを取り上げ、そこに「人」を読み取るという意図が潜んでいる。それが作為かどうかは、開発チームの一人一人に尋ねるよりほかないが、少なくともコラムのそこ

かしこに、「外国人材」への「思い」があるのには違いがない。

4.3 「コラム」という表現形式

「日本語でケアナビ」は教材でも学習コースでもなく、偶々関心を持つ読み手に対して提供する小さな情報に過ぎない。それを「コラム」に落とし込んだのは苦肉の策であろう。エッセイ調の語り口には知識伝授（だけ）ではなく、日本語教師が多言語、多文化と取り組む仕事を通じて醸成してきた「思い」が溢れる。それを盛る器として、融通無碍とまではいわないが、読者への語り掛けを狙ったエッセイ調のコラムがそれに最適であったと考えられないか。

これらの「思い」は、論文や研究書として記述されることは少なく、むしろそこでは情緒的と認識される表現は避けられる傾向がある。「コラムほっとケア」はその「思い」を受け止め表現する装置としての機能を担っているのではないだろうか。

4.4 「中間的存在」としての日本語教師、その「思い」と認識

「日本語でケアナビ」は、特定の日本語コースや研修生を対象にするというよりも、学習者、その支援者も含めたより多くの人々への支援を目指して開発されたものである。開発チームの主要メンバーは数名（中心となるのは6名）で、多くは日本語教師であった。そこに医療、看護、介護、Web デザイン、各言語の翻訳者など多くの協力者が加わり作り上げられた。一旦、公開が始まったあとは組織内にて担当者によって維持管理が行われている。その開発プロジェクトの中で、日本語教師たちは、どのような「思い」を込めてきたのか、それをどのように具現化してきたのか。そして、日本語教師の実践知とは何か、という問いを探る一つの手段として、本稿では「コラムほっとケア」の分析を試みた。

コラムを独立したものとして見ると、異なる言語間で取り上げている項目や内容にばらつきがある。当該分野専門家の協力を仰ぐという手法もあったかもしれない。また、看護や介護の専門用語に特化するという方法もあっただろう。その意味では、ある種の素人くささが残る。

筆者は、日本語教師が専門職であり、専門的な実践知を獲得した人々としていたのだが、論証しようとするほど、その「中間的存在」としてのあいまいさに陥ってしまいそうになる。しかし、中間的であることにこそ、日本語教師の存在価値の一つがあると言えるのではないか。学習者と日本社会（この場合は、介護の職場や暮らす社会など）をつなぐためには、教育実践の現場で培ったさまざまな（あるいは雑多な）知見が有意となることがある。中間的な場所に置かれた日本語教師の「思い」を表現する手段は、論文だけでなく、エッセイ風のコラムに発揮されているということもあろう。

日本語は学習し、習得するのに時間がかかる言語だといわれることが多い。さらにそれを業務で運用するレベルに達するには、相応の時間と努力を要するのはどのような言語背景の者にとっても難題と言えよう。外国語をマスターして仕事で使えるレベルにするとなれ

ば、日本語学習に限らないのは言うまでもない。言語教育者として日本語教師がコラムで伝えたかったことは、【言語知識】の多さにも現れている。一方で、外国の【価値観】を取り入れているところには、外国人材を人として受け入れ、ともに働く職場の仲間として共生の実践へとつなぐことが意識されている。

教育実践から得たことばを学ぶ面白さ、難しさ、そして知識だけでなく、身体的行為としての言語学習とその結果としての習得と日々格闘しているのが日本語教師である。学習者（学び手）の背景、目的、個性などの多様性とともにある者が、中間的な存在であることは、事実であり、その意味認識は多層的である。

4.5 まとめ

- 日本語教師の視点から、「コラムほっとケア」には【言語知識】に関する項目が多いが、そこには言語背景となる日本人の【価値観】が内包され、言語として表出されている。したがって、日本語のコラムには、言語表現の中に表れた【価値観】が潜在している。
- フィリピン、インドネシアの文化事情では、【価値観】を表す表現が取り上げられていた。そこには、介護の専門職としてだけでなく一個人としての「外国人材」の存在が強く意識されている。
- 上記両者の違いは、言語や文化に関する情報量の差によるものであろう。知りすぎている日本語については、言語として現れるものや現れ方に注目しがちで、外国の言語や文化については、代表的な概念項目を挙げるにとどまる。
- 「コラムほっとケア」作成の背景には、日本や外国の言語と文化に対する洞察と認識があり、これは「中間的存在」である日本語教師として教育現場での経験から培ってきた認識である。
- 日本語教師は、教育実践の中で日本語の知識や運用、また学習者の言語獲得について多角的な情報を獲得している。それらが上記の認識につながっている。

おわりに

「特定技能」の枠組みで「外国人材」を大幅に受け入れる動きが進もうとする矢先、2020年度から世界中で新型コロナウイルス蔓延という事態が発生し、その影響はすでに3年目を迎えても収まる気配がみられない。「コロナ以後」の世界は従来とは一変するものになっていくことは想像に難くない。その変化が良きものをもたらすか、あるいは未経験の困難をもたらすかについて言及できる者は、おそらくどこにもいないだろう。その中で、「外国人材」が介護現場で力を発揮している姿は、すでに日常の風景の一つになっている。

日本語教師が培ってきた実践知とは何か、それはどのように記述されているか、という問いを立て、本稿では「日本語でケアナビ」にある「コラムほっとケア」の内容を分析に取り組んだ。「外国人材」が人として受け入れられ、職場で同じ同僚として、地域社会で同じ市民として、ともに生活していく人として意識されることへの願いが【価値観】に現れている。

日本語教師が教育現場で培ってきた知識、技能とともにこのような「思い」もその実践知と考えることができるのか、さらに、その「思い」を社会に対して日本語教師は伝えてきたのかという問いのもとに引き続き考察を続けたい。

参考文献

上田和子 (2007) 「『看護・介護のための日本語教育支援データベース』開発調査をめぐって」

『国際交流基金紀要』第3号、183-190, 国際交流基金

上田和子・田中哲也・前田純子・嶋本圭子・角南北斗 (2008) 「インターネットサイトによる

日本語教育支援—「日本語でケアナビ」の開発と一般公開を事例として」『国際交流基金紀要』第4号、169-176, 国際交流基金

上田和子 (2009) 「ブログによるプロジェクト評価」『国際交流基金紀要』第5号、67-82、

国際交流基金

関連サイト：

「日本語でケアナビ」

日本語/English 版 日本語でケアナビ Nihongo de Care-Navi (nihongodecarenavi.jp) (2022, 07.20 接続日)

「特定技能の在留資格に係る制度の運用に関する基本方針について」厚生労働省 HP、000499273.pdf (mhlw.go.jp) (2022, 07.20 接続日)

(うえだ・かずこ 本学教授)